〈青森県史〉の窓 131

盆のしきたり

福島 春那
（県民生活文化課 県史編さんグループ非常勤嘱託員）

ナノカビ、ナヌカビといえば、ねぶたの最終日である。青森のねぶたでは、昼間に大型ねぶたの運行がにぎやかに行われ、夜には花火とともにねぶたの海上運行で盛大なフィナーレを迎える。弘前では、市内の合同運行を終えたねぷたが、7日の朝から集落を練り歩く。かつては、この7日の暁にねぶた・ねぷたを川や海に流したという。

この日は、南部や下北地方ではナヌカボンという。ナヌカボン、つまり七日盆の習俗は、盆の始まりにあたるといわれ、県外でも各地に見られる。

下北地方では、「各家では、赤飯や煮しめを仏壇に供える。子どもたちは『七ゲリ（回）ママ（飯）食って、七ゲリ水浴びる』とされ、赤飯を持って海や川に水遊びに行く。新仏のある家では、3年間、13日の他にこの日に墓参りをする」（『青森県史民俗編 資料 下北』）という。津軽でも同様に「小豆ママ（ご飯）を炊いて、一日に7回食べて、7回泳ぎに行く」といい（県史叢書『岩木川流域の民俗』）、「墓の草取りをする」（『西浜と外ヶ浜の民俗』）という所もある。来る盆に向けて、身を清めつつ、祖先の霊を招く準備に心を砕く日であったのだ。

そうして、迎える盆の入りといえば、13日である。県内では、盆の墓参りを「ホゲに行く」といった。ホゲは「ほかい」、食物を持ち運ぶための木製用具が転じたといわれている。墓前にてハスの葉やコモを敷き、そこにほかいから赤飯や煮しめなどを供える。掲載の写真は青森市久栗坂の墓参りの光景をおさめたもので、パインアメの缶がほかいに使われている。

現在では折に詰めた料理を墓前に供え、手を合わせた後はそれを持ち帰ることが多いが、かつてはそうして墓前に供えたものと同じものを、墓参りに訪れた家族みなで食べた。家族そして、あるいは祖先の霊と飲食をともにするのである。

津軽の、特に内陸では、墓参りを終えると、今度は家の門前で火を焚く光景が見られる。城下町弘前市の亀甲町通りなどでは、各家の門前で焚かれる迎え火が連なり、向かい側の堀の水に映って忘れがたい光景であった、と森山泰太郎氏は記す（『津軽の民俗』）。さらに森山氏によれば、弘前では子供らがこの日を囲んで「オジナ・オバナ、ベココサ乗って、馬コサ乗って、来とうらい来とうらい」とはやし立てたという。板柳町では「秋元の明かりに茶コ飲むにござれ、ござれ」と言ったといい、盆に訪れる霊を「お爺さん、お婆さん」と火を頼りに呼び込む古風な姿を指摘している。

さて、このように盆は祖先の霊を迎える行事であるのだが、一方で、生見玉（いきみたま）といって、盆に健在な両親へ馳走し祝う風習がある。関東・東北地方では嫁いで家を出た娘が実家に米などを持参し料理し両親にふるまうという（『民俗学事典』2014年、丸善出版）。管見の限り、生見玉として報告された事例は津軽の近郊にはないが、嫁の里帰りの機会として正月、盆は広くあげられている。

盆は、祖先の霊を迎えるとともに、家族の縁を再確認する機会なのであろう。盆の迎え方、過ごし方は時の流れとともに変わっても、帰省ラッシュの渋滞を乗り越えて、故郷の家族に会いに行く気持ちは、古くからそう変わっていないのかもしれない。

盆の墓参り＝1962（昭和37）年8月13日、青森市久栗坂
川村昭次郎氏撮影、川村英明氏所蔵。
『青森・東津軽の昭和』（いき出版）より転載